

令和2年度第2回 広島城のあり方に関する懇談会 議事要旨

1 懇談会名称

広島城のあり方に関する懇談会

2 開催日時

令和2年12月2日（水）14:00～16:00

3 開催場所

広島市役所本庁舎14階 第7会議室

4 出席委員等

(1) 委員

三浦正幸委員（座長）、本田美和子委員、高田義治委員、平野公穂委員、
飯田稔督委員、上田宗冨委員、金城一國齋委員、角倉博志委員

(2) オブザーバー

広島城館長、広島市緑政課長

(3) 事務局

広島市市民局 市民局長、文化スポーツ部長、文化のまちづくり担当課長 ほか

5 議事（公開）

- (1) 広島城天守閣耐震対策について
- (2) 懇談会の進め方について

6 傍聴人の人数

8人（報道関係者を除く）

7 懇談会資料名

- ・広島城天守閣耐震対策について【資料1】
- ・懇談会の進め方について【資料2】
- ・広島城基本構想【参考資料1】
- ・広島城天守閣耐震診断調査結果【参考資料2】
- ・史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準（文化審議会文化財分科会）【参考資料3】
- ・鉄筋コンクリート造天守等の老朽化への対応について（取りまとめ）、
天守等の復元の在り方について（取りまとめ）
（史跡等における歴史的建造物の復元の在り方に関するワーキンググループ）【参考資料4】
- ・名古屋城天守閣木造復元市民向け説明会資料（名古屋市）【参考資料5】

8 議事要旨

- (1) 広島城天守閣耐震対策について 及び (2) 懇談会の進め方について
（三浦座長）

- ・議事(1)「広島城天守閣耐震対策について」及び(2)「懇談会の進め方について」は、併せて説明をお願いする。

（事務局）

－ 資料について説明 －

(三浦座長)

- ・参考資料「議論の全体的な枠組み（イメージ）」で、「現天守閣」から二つに分かれているのは、上は最終的に木造復元を目指し、下は、木造復元を目指さず天守閣の耐震補強をするものである。ただし、耐震補強の場合には、現時点から起算して20～30年後、耐用年限が切れる時に、再び木造復元を目指すのか、又は老朽化した天守を解体して天守台の石垣だけにしてしまうのかを考えることになる。
- ・上の木造復元を目指すときは、右のほうで「耐震改修なし」と「耐震改修あり」に分かれる。このうち「耐震改修なし」ではすぐに現天守の木造復元を目指し、「耐震改修あり」では、木造復元するのに少し時間がかかるので、当面の間、耐震改修して凌いで、時期になったら木造復元をするということである。
- ・資料1の8ページ下枠「広島城における想定時期」で、名古屋城の事例から木造再建に約20年を要するとあるが、厳密には正しくない。名古屋城は、木造再建の手續に問題があり、非常に時間の浪費があったことから、5年間近くを無駄にしている。なおかつ、適切な手續がうまくいかず、さらに数年間の遅れが考えられるため、これにより木造再建に20年かかるとは思っていない。名古屋城と同じ轍を踏まないように上手くやってもらいたい。
- ・一般的に、資料調査や現天守の価値を調べるなどの準備に大体2年間ぐらひはかかる。それから、文化庁の許可を得るのに最低2年間、解体と現天守の石垣や地下遺構の調査でまた2年間、そこまで6年かかり、最後の2年間ぐらひで実施設計図を作ることになる。その後、4～5年間ぐらひで木造建築工事が完了する予定であり、大体10年を超えるぐらひと思ってもらえればよいと思う。
- ・資料1の12ページに、木造再建事業に係る費用試算があるが、①から⑧までの直接経費約86億円のうち、④建築工事費が40億円とあるのはかなり妥当な数字であるが、⑤～⑦の管理費が、現場管理費、一般管理費と設計監理費を合計して17億円以上で、40億円の建築工事費としては高過ぎるので、今後の精査により値段が変わる可能性がある。
- ・資料1の14ページの実測図に関して、文化庁が木造再建の基準を緩和したが、緩和する前の基準では実測図面があることが条件だった。広島城では、14ページの実測図面のほか、1階から5階までの各階の平面図が全部揃っており、一応基本図面は全部揃っている。
- ・資料1の15ページの写真は一部で、大体各階の内部の写真が揃っている。外観は南側が圧倒的に多くて、北側はちょっと少ないが、それでも一応天守の四方から見た姿が全て写真に写っている。これだけの資料が豊富なのは、名古屋城を除くと他に例がない。
- ・天守の完全な復元資料がないときは、定義が別の復元的整備になるが、本当の復元ができる天守としては、名古屋城に次ぐものである。したがって、広島城天守の木造復元は、文化庁からも非常に期待されるべきところである。以上のことを念頭において、皆様の忌憚のない意見をいただきたい。

(角倉委員)

- ・木造再建は、色々な条件をクリアして実現できれば非常に望ましい。
- ・参考資料「議論の全体的な枠組み（イメージ）」の「延命化」で、耐震改修をやると、色々な検討をする必要はあるが、現天守を30年間使えて、最終的に、30年後に木造再建をしないのであれば、石垣だけが残るという説明だったと思うが、その際に、RC再建するという選択肢、あるいはRC再建をして耐震改修を行うという選択肢は、文化庁からの認可が非常に得にくいことが予想されるという理解でよいか。

(事務局)

- ・広島城は、木造復元のための根拠資料が非常に豊富に揃っている状況なので、文化庁からすれば、復元的整備を選ばず、復元を選ぶことが通常だという考え方をするものと理解しているが、もし、三浦座長の方で何か見解があればお願いする。

(三浦座長)

- ・復元的整備による天守はかなりたくさん見込まれているが、本当の復元は4城ぐらいしかない。したがって、名古屋城に次いで2番目に根拠資料が豊富で、しかも価値のある天守であるので、文化庁としては相当期待をしているだろう。
- ・それにも関わらず、諸般の事情で、現天守を耐震補強して、今から30年くらい持たせることについては理解を得られると思うが、現天守を取り壊し、また再び鉄筋コンクリートで建てるのは、おそらく理解を得られるはずがない。要するに、なぜ資料があるのに復元的整備を選ぶのか、確固たる理論がない限り認めてもらえない。
- ・現天守を解体して、鉄筋コンクリートで再建することが、非常に価値があるのであれば、選択肢として否定されるべきではない。直ちに、コンクリートの天守を再建するほうがよいという意見があればいただきたい。

(角倉委員)

- ・そういうところは市民には、少しわかりにくい部分だと思う。今後、市民にアンケート取るときに、しっかり説明をすべきと思う。
- ・木造再建については反対ではなく、それができれば望ましい。
- ・ロマンとソロバンという本の話がある。木造復元の利点については、広島城の文化的価値を高めるとともに、広島中心部の活性化に必ず役立つと思う。そのロマンには共感もするし賛成だが、問題はソロバンの方だ。方向性を決めるには、もう少し具体的な検討が必要である。座長の話では、86億円から少し減るかもしれないということだが、こういう大規模プロジェクトは、金額がどんどん増加する傾向にある。市の財政から、必要資金をどこまで支出可能なのか、あるいは国補助金を活用できるのか。それができないと寄附になるが、誰がどう集めるのか、ほとんど未定では、まだ説得力がないように思う。
- ・木造再建に経済メリットは当然あるが、広島城や広島市内への観光客、今コロナ禍だが、今後、インバウンド客をどう見て、どれぐらい増えると読んでいくのか。費用対効果はどうすり合わせていくのか。経済波及効果はどれぐらいあるのかということも見ていくべきである。
- ・ほかの地域で木造再建した城がどういう状況かについて市民に伝えたほうがよい。
- ・木造再建できるようなら、できるだけ早い方がいいというのが大方の意見と思う。ただ、20年だと長過ぎる。名古屋城は500億円の予算規模で、広島城は規模が小さいので、予算は86億で済むかもしれないが、工期はもっと短くなると思う。名古屋城は文化庁との調整に非常に時間を要しており、スケジュールについてもできるだけ短縮して実現できるような具体的な検討が必要である。

(三浦座長)

- ・木造再建の経済波及効果は是非調査する必要がある。コンサルタントに依頼して数字等を出せば、木造再建が妥当なのか、少し考え直すべきかよくわかる。是非ともやっていただきたい。
- ・他の木造再建の事例で、掛川城、大洲城、福島県の白河小峰城、宮城県の白石城の4城が木造再建しているので、木造再建したことにより、市民の城に対する愛着若しくは郷土に対する愛着が湧いたか、観光客の満足度、城の知名度の向上に効果があったか是非とも調べていただきたい。
- ・工期について、耐震改修するだけならそれほど工期はかからないが、RC造で再建だと、木造再建したときと、かかる時間はほぼ同じである。調査期間や許認可、石垣の調査、地下遺構の調査も全部同じで、違うのは再建するときの建物の建築工事だが、木造とコンクリートではあまり変わらない。

(金城委員)

- ・木造復元に関して今後議論していく中で、おそらく賛否色々な声があがると思う。大切なのは、歴史的文化的価値への一般市民の方の理解が、最も重要だと思う。
- ・天守閣の木造復元にとどめるのか。史跡広島城跡整備基本計画書には、第1期として、平成6年に完成した二の丸の整備、第2期で本丸の整備について、復元的に再建した天守閣の耐用年数が切れる時点に設定すると書かれている。62年経過した今回のことである。その以降の第3期、中御門、裏御門、東小天守、南小天守やその間の廊下とか、そういったものまで含めて書かれている。
- ・参考資料「議論の全体的な枠組み(イメージ)」の中に、築城当初から現存する石垣を含む城郭全体のあり方についても検討する必要があると記載されているので、まず、今回は天守閣に限っての議論なのか、それとも全体に広がる議論すべきなのか、その辺りの考え方について教えてほしい。

(三浦座長)

- ・この「広島城全体のあり方を考える懇談会」は、別に天守閣だけではない。ただ、今日は、天守を木造再建するのか耐震補強にとどめるのかについて、皆様から意見をいただきたいので、なるべく天守の話をしていただきたいと思う。したがって他のことについても、どうしてもということであればいただいても構わない。
- ・ただ、現在の天守は、原爆で倒壊した天守に比べると、東小天守等を結んでいた東廊下が再建されていない。資料14ページ左上の実測図面は、天守閣を南から見た図で、右の方に、2階及び1階建ての廊下状のものがあるが、これが東廊下で、原爆倒壊まではこれが残っていたので、もし木造復元をするのであれば、この廊下も再建するのか、まだ今日決めることではないが、当然議論すべきことである。木造再建に際して、この廊下を一緒に再建すべきだという心強い皆様の意見があれば、是非言ってもらいたいと思う。

(金城委員)

- ・そういった意味で全体を考えていくのも大切なことと思う。もう1点、現収蔵資料について、耐震改修若しくは木造復元のいずれにしても、展示スペースの減少は考えられ、なおかつ、収蔵庫が非常に不足しているという現状がある。今、広島市の資料館等に分散して収蔵しているようだが、今後、三の丸が整備される中で、展示スペース若しくは収蔵スペースも設けるという話になっている。
- ・今後、木造復元になった場合、その大半を収蔵庫に保管することになり、そのスペースも変わってくる。三の丸の整備計画にも関わるので、そのことを含めて検討すべきである。

(三浦座長)

- ・耐震改修の場合は、展示スペースが減るだけなので、全部を撤去するわけではないが、木造再建した場合だと、天守に余分な重さを加えたくない。それからコンクリートの建物だと内部が近代建築なので、資料館として展示物を置いておかないと様にならないが、木造の場合ならば、木造の骨組み自体が鑑賞の価値のあるものになるので、逆に色々な展示物を置いていく必要がなくなる。
- ・木造再建の場合は、現在天守閣においてあるものは、ほぼ全て移転する。これは当然議論する必要がある。新しく収蔵庫若しくは展示施設を作る、若しくは、現在あるものを活用することになると思うが、それについて、皆様の意見をいただきたい。

(上田委員)

- ・金城委員などの話にもあったように、多額な資金の目途が可能であれば、木造再建は魅力

だが、果たしてその中で魅力の増になるかというのがある。

- 熊本城はコンクリートだが、重厚で壮観でとても格好よく、皆憧れる。何か戦国に思いを馳せるような思いになる。1989年の広島城整備跡整備基本計画を見ると、天守閣と廊下を挟んだ三層の東小天守と南小天守の図面があり、実に美しく格好いい。見る人が美しいとか恰好いいというのが、大きな要素と思う。
- 東小天守・南小天守について、名古屋城の場合には小天守のことも580㎡で木造復元と書いているということは、広島城の場合は図面はないものと推測しているが、それならば、両方の小天守をコンクリート再建したら、大いに魅力があがるのではないかと思った。
- 金城委員の話にもあった展示のことだが、天守閣の博物館機能は、木造再建したら何もできなくなる。そのものを鑑賞して歴史を知ろうとするのだから、天守閣の木造再建と博物館機能を持つ建物を作ることは、対の話だと思う。
- 主要な政令都市の中で、歴史系博物館や美術館がないのは広島だけである。今回、名古屋城天守閣の資料が色々出ているが、名古屋市には、武家文化を紹介する著名な徳川美術館、城内には武家文化を紹介する建物もあり、能などの衣装を展示できるようになっている。そして最近の本丸御殿も再建された。
- 広島は、今日まで、広島城天守閣の施設が広島市内で唯一で、そういうものを全部対応するのは非常に厳しい状況だ。木造復元の話が進む場合、当市にとって歴史系博物館機能は、県民・市民あるいは内外から来る人にとっても、ますます必要になると思う。
- 説明にあったが、広島城の展示施設は、約1,000㎡である。今の収蔵部分は、実際は空きスペースを利用している。厳しく言うと、ないに等しいような状況である。少なくとも、今は展示できるだけ展示していると思うが、今の展示施設を含め全体でどのぐらい使っているのか、天守閣から全部出ていくとしたら、おそらく倍くらいの、例えば1,500㎡なら3,000㎡とか、2,000㎡なら4,000㎡とか、それぐらいのものを考えないと、この後、対応できなくなる。
- 財源調達だが、20年ぐらいと頭にあった中で、座長から先ほど、10年から11年と説明されたので、若干違うかもしれないが、財源調整を考えると一つの目標に向かって大きなインパクト等がいると思う。
- 西国の雄、毛利輝元が築城してから450年は、2039年が節目の年だが、その6年後は被爆100年に当たる。どんな悲惨な歴史上の出来事も、100年たつと文化として昇華し、世界に注目され続けるということは、世界の歴史の中にたくさんある。被爆後100年の事業として取り組めば、国内外に大きなインパクトを示すことができる。築城450年と被爆100年がリンクできるような大きなものが何かイメージとして出てくればいいのかと思う。
- 事務局から説明があったが、調査運用部隊は、名古屋市は50人規模であると聞いている。広島は被爆後経済復興を最優先せざるを得なかった。市は世界に向けた平和都市としての活動もあり、歴史文化の人材が育てられなかった。経済界も歴史・文化になかなか目が向かなかった。誰も責められない。本当に大変だった。私自身も、戦後の広島の中で、上田流の再構築はそう簡単なことではなかったと実感している。ようやく歴史や文化に風が少し吹いてきたなと肌で感じたのは、被爆50年後ぐらい、まだ25年ぐらいだ。
- この、調査運用部隊は、人材育成を始め、他の都市以上に腹を据えてかかり、人材と資金投入をしなければ、この計画そのものが中途半端になる。この事業の成功は調査運用部隊にあるといっても過言ではない。

(三浦座長)

- 展示施設に関して、大きな都市、特に政令指定都市で、歴史系の博物館がないのは広島市が全国唯一である。これは恥ずべきことで、以前からよく言われることである。また、広島城天守を木造再建すれば、現在の展示物は展示できなくなるし、それから、耐震補強した場合でも、展示面積が非常に制約されてしまう。

- もう一つの問題は、現在の天守閣の耐震補強した場合、博物館としての展示を考えたときに、文化財として指定されているものを展示するには不適切な施設である。現在、大変大事な、上田委員と関係がある浅野家の馬印が天守閣に飾ってあるが、展示してから大分経過し、見るたびに劣化をしてるような気がしており、やはり展示環境は非常に悪い。そうすると、木造再建でも耐震改修でも、展示機能の欠如は決定的なので、広島城だけではなくて、あわせて、歴史的な博物館の整備というのを、当然考えられるべきである。
- 東小天守と南小天守を併せて再建されたらどうかということだったが、歴史的に、広島城の小天守二つが建ったのは、間違いなく関ヶ原の戦いの前であり、毛利時代に建っていることは確認できる。この二つの三重の小天守と五重の大天守が全部そろえば、熊本城よりもはるかに大きな天守になり、その規模から考えると、日本で第1位、要するに姫路城天守と並ぶくらいの、超巨大天守群になることは間違いない。その壮観さは、もう考えただけでも心が弾むくらいの、日本一の景観になることは間違いない。
- 問題は、復元についての文化庁の規定だが、天守については完全な復元の資料があるが、小天守に関しては、南小天守は一階の各階の大きさは資料でわかるが、三重であったことと大まかな形が正保城絵図に描いてあるだけで、あまり形がわからない。東小天守に関しては、この規模のほかに、北側から写された写真が1枚だけ、樹の陰にちょっと隠れてかすかに写っている写真が1枚ある。その資料から考えると、小天守は、現在の基準だと、復元的整備であって、復元ではないということになる。
- 一部は復元で、一部は復元的整備ということについて、文化庁は何も考えてない。今から約35年前、当時の文化庁の、おそらく課長が広島に来たとき、広島城は実測図面があるから、天守を木造で再建して、小天守はコンクリートで作ればどうかといていたが、さすがにまだ耐用年限が全く来ていなかったの、当時の新しい天守を壊すことは考えられなかった。いずれにしても、木造再建を目指すときに、本来あった東小天守と南小天守を再建するのか再建しないのか、復元的整備とするのか、これは当然議論の必要があるので、調査期間中に資料等を集めて、再建に値するとか、できないのか、そこまでの調査検討が必要になる。
- 人材について、名古屋城は、日本で1番たくさん城の整備や管理の人材を擁しているが、名古屋市の場合は、人数は多いが、各部署から集めた方々であり、定期的な異動で、長く同じ部署にとどまることはない。広島城のような大事な遺跡を維持管理するためには、ただの異動人事ではなくて、かなり長い間、その事業に携われるような人の配置をする必要があると思う。これはまた別に考えてもらいたい。

(本田委員)

- 少し追加するような話だが、展示スペースについて、私は19年ほど、広島城で学芸員をして、展示や保管にずっと関わってきたが、正直非常に辛い。まず、上階の展示スペースまで重たい資料を階段で持って上がらないといけなとか、外気の密封性もない、展示室も狭い、収納スペースも壁面にへばりついてる形で、収納するのも非常に困難だった。
- そういった中で、学芸員は色々工夫しながらやってきたが、最後の頃は限界を感じており、皆でよく、天守閣を再建するかどうかは置いて、天守閣自体は観光的な目玉としてとらえて、展示スペースはよそで作ったほうが、よりよい展示を見せられるし、資料の保管上もいいだろうと常々言っていたところで、この機会に議論できるのであれば、是非、天守閣外に展示スペースを作ることを考えてほしい。
- 天守閣には、細かいものを含めて数千点レベルの資料が保管されており、そのほとんどが、実は一般市民の方からの寄贈である。広島の歴史を伝えてほしいということで、皆さんが心を込めて寄贈いただいたものなので、その行く末も、経緯を含めて、考えてほしい。
- 個人的には、学芸員として、きちんと木造再建されたものを見てみたいというのは常々思っているので、こういう機運が高まっているのは、大変いいことかなと思う。

- ・こういうお話が出たので、周辺の人にどう思うか聞いてみた。やはり中には、何故という意見はあり、今の建物を使えるのなら今の建物でいいじゃないかという意見も当然ある。
- ・今の建物はいずれ限界が来るので、壊してしまわないといけないものではあるが、現在の天守閣は復興のシンボルとして再建されたもので、大変突貫工事で作られているが、それに携われた方々は、それこそ心血を注いで関わられていた。外装の設計に携わった宮大工さんの遺族の方から設計図をいただいたことがあって、そのときのお話で、その方の仕事に関する資料というのはほとんど残ってなかったが、広島城の再建した外装の破風であるとか、その設計図面だけ、大切にとっておられたそうで、その方にとって思い入れがあったんだと思う。そのため、今の建物を壊せばいいというものではないと考えているので、今の鉄筋コンクリートの建物に対する一般の方の思い入れを汲みながら、木造への再建という議論をしていただきたい。

(三浦座長)

- ・展示スペースについては、先ほどから意見が出ているが、やはりゆゆしき問題である。
- ・現在のコンクリート天守だが、この耐用年限が今から30年後ぐらいに切れてしまう。これはコンクリートの中性化により物理学的に耐用年限が来てしまうが、耐用年限が切れてから取り壊せばいいというものではなくて、今、本田委員が言われたとおり、市民の非常に深い思いによって復元されたものである。私も、写真でその設計図を見たことがある。破風のところの瓦の写真から見て、一生懸命スケッチで正しい形を理解しようとしたものがあつた。多分その中に含まれていると思う。
- ・現在、戦災等で無くなった天守閣があちこちでコンクリート再建されているが、広島城天守の外観は、全国のコンクリート天守の中では第一位の精巧さである。
- ・ほかの城の天守は相当にひどい。窓の数が違ったり、大きさが違ったり、プロポーシオンが違ったり、惨たんたるものだが、広島城天守については非常に正確で、原爆で倒壊する前と現在違ってるのは、東の廊下が予算の関係上再建されていない点である。
- ・また、南の廊下のところが、戦災前は2階が白壁だった。南小天守とくっついていた廊下だったが、南小天守を取り壊したときに、廊下を半分取り壊したせいで、ほかのちょうどこの切り口のところを仮設的に白壁にした。その白壁になっていた仮設の壁のところを、天守の入口が仮設壁では格好が悪いので、現在の天守再建のときは、それを玄関のように窓を付けて、体裁を整えてある。その部分は意図的改変だが、非常によくできた出来栄である。したがって、コンクリートで再建された天守の中で、1番外観の復元に成功した例として、これは絶対に検証していただきたい。
- ・文化庁の要望も、現在のコンクリート天守を木造で復元する場合においても、今建っている建物について、十分に歴史的価値、それから使われている技術、それから再建に至った経緯、この場合、広島、特に市民からの寄附又は色々な援助、期待もあつたと思うので、これも是非とも、文化庁の要求にもあるが、特に力を入れて報告書を書いていただきたい。

(平野委員)

- ・観光とにぎわいという部分から、意見を言わせていただきたい。広島城の木造復元を是非にとは思いますが、資料に書かれているように、期間的なもの、また改修をしてる間にどういう形で残しておくのかは大きな課題だが、観光から考えると、広島に来る観光客の方は、外国人も含め、どうしても原爆ドーム、宮島で終わってしまうという課題がある。
- ・他都市では、お城は観光地の中心にあるが、広島に関しては、なかなか足を運んでもらえていないといわれている。広島城の希少性を考えて、地域の方を含め、広島城、広島の歴史を知ってもらおう、圏域外に広報していくことで、多くの方に来ていただける観光拠点になり、また、広島の都市部、今、旧市民球場跡地、平和大通り、中央公園、また三の丸が、今後、数年にわたって開発され、にぎわい施設のようになっていくと、広島城天守閣は大

きな回遊性を高めるきっかけになってくる。

- そのためにも、耐震改修でも木造復元にしても、魅力的な形での復元というものを考えていく必要がある。大きなお金がかかり、10年を超える期間がかかることになれば、市民の方にしっかりと理解していただくことが大事だと思うので、児童生徒に対して、今以上に、広島城の歴史というものを、知ってもらう機会を作るとか、一般の方、市民に関しては、シンポジウムやワークショップを行い、正確な情報を地道に発信していくことが大事と思う。
- 圏域外の方、広島以外の方に対しては、SNSやWebを使うとよいかと思うが、やはり木造復元をすることになれば、広島のみならず、全国へ向けての大きな話題になると思うので、それを機会に多くの方に興味を持っていただくのが大事と思う。

(三浦座長)

- これは日本の城郭としての価値だが、関ヶ原の戦い以前、まだ豊臣大坂城が建っていたとき、その時期において、五重の天守に三重の小天守を2基建てた状況は、日本で第1の景観であって、大坂城を超えていた。
- 石垣の量が壮大な量で、関ヶ原の戦い以前に作られた石垣がこれだけたくさん残っている城は、ほかにはほとんど例がない、非常に早い時期の城として極めて壮大であった。
- なおかつ、今回話題となっている天守については、天正20年（文禄元年）には完成していたことが最近の学術研究で大体明らかになり、天正20年完成ということは、信長の安土城の天守が天正7年、豊臣大坂城が天正13年なので、安土城と比べても13年、豊臣大坂城と比べてもたった7年しか違わない。要するに日本の天守の中で飛び抜けて早い天守であって、現在残ってる現存12天守、またほかに焼けてしまった天守も含めて、少なくとも太平洋戦争まで残っていた天守の中で、極めて古い、要するに天守の歴史もしくは城の歴史自体を明らかにする中で、特に価値の高いのが広島城である。
- したがって木造再建をすればもちろんのこと、耐震改修をする場合においても、この広島城の歴史的な価値、それからお城としての価値というものを、広島の皆様によく知っていただく、それから全国の日本の方々にもよくわかっていただく、そのためには広島市を中心とした色々な方法での広告が非常に必要になってきた。是非とも、日本で最も重要なお城の一つであるということを発信していただきたい。

(飯田委員)

- 元々木造復元には20年かかると伺っていたので、壮大な話なのだと思っていたが、座長からは10年11年ということで、かなり現実的な話だと思うので、歴史文化的な調整なり、でき上がったときの観光面での訴求性であったり、先ほど、平野委員からも言われていたが、広島はどうしても、平和公園と宮島でもう多くの観光客の方は通過してしまって、よその土地に行ってしまうというところなので、是非、広島での回遊性を高めて、広島をどんどん親しんで、楽しんでいただくということが必要と思う。
- 10年11年、15年くらいかかるかもしれないが、それは本当にあつという間の話だと思うので、是非、あり方に関する懇談会があるこの機会に、木造復元に、色々課題はあるが、それをクリアして、木造復元をすべきと思う。
- 本田委員からもあったが、私も弊社で京都鉄道博物館を作った際に、準備と開業で、少しだけ携わった学芸員の方と色々議論して、かみ合わなくて苦しんだこともたくさんあったが、それからずっと、今の天守閣はやはり展示をする場所ではないと思うし、そもそもそこに展示をする必要もないと思うので、この機会に、木造復元を決めてしまって、展示をどこかできちんとすることまで持っていければ、非常にいい機会だと思うので、その方向で話がまとまって、市民の方に御理解いただければ1番いいと思う。

(高田委員)

- ・私どもの日本旅行業協会は旅行会社の集まりであるので、観光の部分でとらえて、もちろん、新しいものができ上がって、それが、先ほど座長が言われた日本一であれば、お客さんは、たくさん来ると確かに思う。
- ・その期間が11年かかるという中で、天守閣を作るか作らないかの問いなのだろうが、我々旅行会社が商品を作る上で、何もないコンテンツというのは魅力に欠けるので、天守閣がない中での広島城をうまくPRしてもらえればと思う。宮島や平和記念資料館との回遊性を持たせるような観光コンテンツとして、新しくできるまで、ずっと我々が守っていけるようなもので残していかないと、あるいは広島城はどこへ行ったのと言われると、何か寂しいものがあるので、その11年間を、しっかりお客さんをつかんでおくようなプロモーションしていただきたい。
- ・そういう中で、早く、三の丸の施設を有効活用できるような形にして、そこからお客様を色々なほかの観光地に行けるような、回遊性を持たせるような、天守閣はなくても広島城の城郭自体、全体はあるという部分をうまくPRしながら、まずは来てもらうことを考えていただきたい。
- ・また、今の城郭全体が今のままでいいのかという総合的な議論も含めてしていく必要がある。例えば、この周りの樹やお堀とか、この辺りの活用方法が今のままでいいのか、樹は何か色々植えられていて、もちろん被爆樹木とか撤去できないものとか色々あるだろうけど、全体のバランスが取れているのか、階段とかユニバーサルデザインという部分がどんどん進んでいく中で、バリアフリー環境を含めて、きちっとでき上がってるのか、こちらの統一性がきちっとあるのかどうか。
- ・まちの中心にあるお城だから、お城に入れば、武家屋敷もあつた時代感を感じられるような、要はタイムトラベルができるような施設に統一性を持たせた施設にしていただければ、お客さんも、昔にタイムスリップできてすごく楽しかった、一步出れば、広島市内のまち、都会の雰囲気を楽しめる、そういうギャップを楽しんでいただけるようなものにしていくところも必要だと思う。
- ・動向調査を是非やっていただきたい。広島城に今まで来ていたお客様層は、修学旅行生であつたのか、小学生・中学生・高校生なのか、団体なのか、一般の個人のお客さんなのか、年齢層は若いのか、高齢者なのかという部分によって動きが変わってくると思うし、三の丸にバス駐車場があるから広島城に寄っているという可能性もあるので、動線という部分を是非調べていただきたい。要はそこにバスを停めていれば、修学旅行生が、少し距離はあるけど平和記念公園とか、この周辺を縮景園を含めて回って帰る。こんな言い方は悪いが、そこに広島城があるからついでに寄っていました。けど天守閣には上がっていない。そういう形の動きとか出てくるのではないか。
- ・本来の広島城の魅力を作っていたいただきたい。例えばいろんなコンテンツ、夜桜が見れるとか、極端な話だが、桜の日本一の名所とすれば、3月4月に台湾やバンコクなどからインバウンドがいっぱい来るし、2030年にインバウンド6,000万人という目標を掲げているので、それにうまくタイミングを合わせて、桜の木と一緒に植えるとかして、観光客を誘致する。そういう夜のコンテンツも含めた中で、一緒に城郭全体を考えた仕組みを作っていく必要があると思う。天守閣だけという捉え方もあるが、全体を見ながら、文化的であつたほうがいい。

(三浦座長)

- ・天守閣の耐震改修をするにしても木造復元をするにしても、広島城を天守閣だけに限って行うということは当然ありえないことで、周辺について、非常に重要なことが含まれていたのので、ぜひとも検討していただきたい。
- ・木造再建の場合でも、今日から10何年というわけではなく、木造再建に着手してから10何年

だが、工事期間中といっても、この10年間全部が工事時間ではなく、実際の工事期間は、天守の取り壊しから再建までの間、せいぜい5～6年間で公開禁止になる。

- ・耐震改修の場合だと、1年、長くても2年間ぐらいの間、開館できなくなるが、イメージ図の右のほうに、木造再建をするにしても、とりあえず、耐震改修をしておいて、その間に木造再建について進めていく。若しくは、一切耐震改修をせずに、いきなり木造再建するという二つの案が出ている。一体いつ木造再建に着手したらいいのか、若しくは、とりあえずの耐震改修をすべきかどうか、これについてはまだあまり意見を聞いていないので、これについてはいかがか。

(角倉委員)

- ・木造再建した場合に、10年以上はかかるのだろうが、耐震工事でも6年かかる。その期間は休館し、耐震改修実施後の天守の使用期間が5～6年で、さらに耐震改修工事に、今出していない共通仮設費も加えると、10億円程度はかかるのであれば、さすがにもったいないと思う。木造再建ということであれば、広島市のリソースも相当必要になると思うので、木造再建に集中してやったらどうか。つまり、耐震改修をせずに、木造再建にまい進したらどうかと思う。

(金城一國齋委員)

- ・私も同意見で、木造再建に向けて準備、文化庁への申請、調査、合わせて6年ぐらいかかり、そして設計図を起こして、本工事になると思うが、その6年という、三の丸が整備されて、オープンする時期が大体その時期に重なるように事がうまく運べば、三の丸のオープンと同時に、広島城天守閣をクローズ、それを同日行うとして、三の丸の整備ができて、そこにたる募金、広島城再建への市民の募金なども新しく作って、そして、本工事に入るのが理想と思う。
- ・その間の6年間、今の天守閣をオープンするかどうかは、私は耐震補強をせずに、現行のままでもいいと思う。ほかの施設でも、まだ結論がでていない施設がたくさんあり、それと同じような感覚で使用できると思う。

(三浦座長)

- ・資料で、耐震改修が5～6年掛かると書いてあり、その後の残った耐用年限は、今から起算して大体20～30年後で、耐震改修をいつから始めるかによるが、もし来年から直ちに始めたとすれば、耐用年限はまだ20年くらい残る。耐震改修をこれから何年も後になってから始めると、耐震改修後の耐用年限が短くなる。耐用年限が5～6年というのは最も短く算定した場合で、大体10年から15年ぐらいはあると思ってよい。
- ・今、どちらかというと、耐震改修はせずに、木造再建を目指したほうがよいということだったが、これに関して、耐震不適格であると明らかになった公共施設を、そのまま不特定多数の方に見学させてよいのかは、事務局のほうで検討していただかないといけない。この場で直ちにそれができるかどうかは答えられない。検討しておいていただきたい。
- ・ほかに御意見はないか。では、この際、広島城に関して何かあれば、意見をいただきたい。

(上田委員)

- ・広島城の中への城郭庭園の作庭について述べさせてもらう。この後しばらく、天守閣になかなか行けなくなる状態も想定されるので、天守閣に行けない状況の中で、人を引っ張るということが大事だと思う。
- ・1番早く形ができて、資金的にも負担が少ないのは庭である。縮景園は今年作庭400年で、私どもは御縁が深いので、随分やりとりがあるが、今、桜の話があったが、縮景園が桜を植えて、皆が桜を見に縮景園に行き始めたのは最近で、まだ20～30年である。

- ・百本ぐらゐの梅林があるが、戦前か江戸期の終わりまでは馬場だった。あれも戦後、一生懸命頑張られた。庭というのは、5年10年である程度形になるが、建築が建築家でないとできないように、庭もちゃんとした監修者、作庭者がいないとできないので、監修者をちゃんと選定して、行政の担当と監修と施工を揃えて、城郭庭園という位置付けで、是非、やるべきである。クローズの間をどうするかについては、庭園が一番可能性のあるやりやすいものと思う。
- ・広島城跡、天守閣を含めて、広島城に行く県民・市民があまりいないように思う。観光客は、天守閣に30万人入っているが、どうも広島市民にとって広島城は足が遠く、憩いの場になってない。今、ばらばらの状態で、まとまりが全くないわけで、憩いの場にするにはどうするのかを考えるのはとても有益だと思う。
- ・一方で、縮景園は、昭和40年、戦後20年たって私が大学生ぐらゐで清風館が復元され、それから、数十年かけてあそこまできれいになった。春夏秋冬、地元のリピーターもすごく多い。通勤族の方も、憩いの場として行かれる。その部分が、広島城の一番辛いところである。
- ・今からの天守閣の木造建築というときに、広島城を身近に思ってもらおう県民・市民を増やし、どうも縁が薄い広島城に目を向けてもらうことで、結果的には、天守閣の木造建築にも民意が非常に高まるので、この件は、とても大事だと思う。

(三浦座長)

- ・閉館期間中も広島城の魅力を欠かないようにするのは非常に大事なことである。また木造再建にしても耐震改修にしても、広島城内に昭和30年以降に生えたクスノキが結構繁茂していて、城内にいても天守が見えないところがある。
- ・景観を配慮した樹木の整備、また桜に関しては、色々なところに適当に植えるわけにはいかないので、広島城の価値を担保しながら、適切なところに植えていくと、一つの広島城の魅力の向上にはなると思うので、そういう様々なことについて、検討していただきたい。
- ・今日は皆様から、天守の改修若しくは再建についての意見を伺った。また次回において、今日の議論を踏まえて、事務局のほうから案をいただき、それで、もう少し深めた意見の集約をしていきたい。今日は皆様方、貴重な意見をありがとうございました。

(事務局)

- ・委員の皆様、長時間にわたりお疲れ様でした。本日いただきました御意見も踏まえながら、引き続き、天守閣を含めた、今後の方向性について検討を進めていきたいと考えている。懇談会の進め方の中で、次回3月上旬と説明したが、それまでに開催をもう一度するかという可能性も含めて、今日いただいた意見を事務局の方で整理させていただいて、進め方については座長を始め、皆さんにご相談をさせていただく。引き続き、どうぞよろしくお願ひいたします。本日はまことにありがとうございました。